

P 3 2 John Dewey / Individualism Old and New

左側、第2パラグラフの7行目から

We may then say that the United States has steadily moved from an earlier pioneer individualism to a condition of dominant corporateness.

これは、デューイが「個人主義」という言葉の今日の使われ方に多少疑問を抱き、現アメリカ社会をもっと的確に把握した時に、単なる初期開拓時代の「個人主義」から、法人企業の支配状態へと確実に移り変わっていることを認識すべきとして指摘した言葉である。私はこの文章の直接的に意味している内容というよりは、むしろアメリカの精神の根底を支えるものの一つとしての「個人主義」がその時代時代で相対的な評価をされながらも、「アメリカ経済の原動力であり秩序の形成」となってきたことを表しているものと考ええる。

内容そのものを素直にとるならば、「個人主義の終焉」というように聞こえるかもしれないが、それは、「個人主義」の定義を狭義に捉えた時の意味である。つまり、デューイが1930年にこの論文を発表した時にはすでに西部フロンティアは消滅しており、工業化、資本主義が発展しているさなかの話であるため、フロンティアによって生まれた「個人主義」を現アメリカ社会にも適応するには、いささか時代遅れである。かと言って、デューイは「個人主義」がもう必要ない、ということを行っているのでもない。なぜなら、この後には、「法人企業の支配状況」がどのように個人中心社会に影響を及ぼしているかを説明し、そこに新しい個人主義の必要性を示唆しているからである。

そもそも個人主義の意味には、二面性がある。一つは、個人の實力を尊重する社会的平等が前提になり、個人が自らの責任のうちに自己の利益を追求するというあくまでも個人からみる面である。もう一つは、個人主義は孤立を意味するものでなく、集団の中の個人として、多数のうちの一と考へながら協力して参加するという集団からみる面である。

個人からみる面については説明の必要はないと思われるが、集団の面についての根拠は、個人利益の追求には個人の公正な行動のためにはその保障、つまり集団からのルールが必要だからである。この考えは独立宣言やジェファーソンの民主主義理念に表されている通りである。

このような二面性のどちらかが、その時代時代で振り子のように現われ、どちらかの面が強調されると、そのどちらかの面に戻る作用として原動力となり、アメリカ経済の秩序を形成しているのではないかと考える。

例えば、フロンティアの自己責任において開拓を推し進めた時は、個人からみた個人主義が強調されていたが、西部の発達とともにその無秩序が顕著になると、それを改める経済的、政治的の制度、つまり集団からの面が要求される。カーネギーのように、高度経済成長期には、個人の富の蓄積が社会の善になるとも考えられたが、同時に貧富差、階級差が問題として浮かびあがり、欧化の始まりとして危惧され始めると、その是正へと社会保障の面が強調されていく。そして、今日のような法人企業のような集団が発達してくると、そこで埋没してしまった個人が強調される。また、企業の意図により人間の趣向や価値観が画一化し、市場が飽和したかのように見え経済が衰退してくると、今度はリスクを背負いながらも新しい産業を生み出そうとする企業家精神を湧き上がらせている。

このように個人主義には、人間の自己利益追求という原始的欲望が経済原動力となっていると同時に、その秩序を守るための「集団の中の個人」という面も包含しており、時代時代で二面性の片方が強調されながら、今日までのアメリカ経済の原動力になったり、または経済秩序を立て直しているように見える。